

なくしてはいけない 大切なコト

富山市青年元気塾 第7期生 思いやりグループ

西村、五十嵐、浜浦、本田、浅野

2011. 3. 11 あの日の衝撃的な出来事から考えたこと
大切な人を守ることができる、大切な人と絆やつながりを大切にできる
そんな意識と知識をもった人が集まるまち「とやま」を目指して考えた
思いやりグループの答えです

1 はじめに

東日本大震災。同じ日本とは思えない光景が、ニュースでひっきりなしに流れ、あまりの悲惨さに衝撃を受けました。そのとき、何か力になれることがないのか、いてもたってもいられず探しました。

しかし、公募されているボランティアは、力仕事ができる人や資格のある人が求められていました。

もし、同じような災害がこの富山で起きたとき、私たちにいったい何ができるのか。人の命に対して危機感をもつようになりました。何かできることがないのか、考える日々が続きました。

そんな状況で出会ったのが、「救命講習」でした。この講習を通して身につけた技術が、これまでの自分とは違う行動を起こせるかもしれない。そんな思いを抱き、行動した、グループのメンバーの一言が、この企画の出発点です。

「人のために何かできることがある」

「まちにくらす人を助けることができる」

「みんなを笑顔にすることができる」

とやまのまちに暮らす一人ひとりが胸をはるることができる、そんな未来のまちづくりを提案します。

2 救命講習の現場から…

富山市をはじめ、全国各地の自治体では、救命講習の開催や普及活動に力を入れて取り組んでいます。ただ、その受講率はあまり高くありません。また、実際に受けてみたところ、介護福祉の関係の方や中高年層の受講が多く感じられました。「救命講習」の技術をまちに広げるために、幅広い受講者層を開拓する必要があると考えました。

また、救命のための技術は、使う機会があまりなく、日常からかけ離れたものと感じている人が多いのではないのでしょうか。そこで、まちのさまざまな人たちの日常に組み合わせた救命講習を企画、提案することで、救命講習の受講率向上をうながし、私たちの考える未来のまちづくりに近づくことができるのではないかと考えました。



3 「お母さん」をターゲットにした「救命講習」

まちに暮らすさまざまな人のうち、誰をターゲットにすればより幅広い受講をうながせるのでしょうか。そこで、まわりの人々への発信力があり、未来を担う子どもの命を宿す、「お母さん」に向けての救命講習を提案します。

●提案1● 育児に役立つ救命講習

お母さんたちの日常といえば、「育児」です。想像を絶する労力を必要とする育児のなかで、救命講習を受講する時間を生み出すことは、大変難しいことです。そこで、乳幼児の定期健康診断のタイミングの活用を考えます。富山市では、中央保健福祉センターにおいても、定期健康診断を行っています。健康診断を受けるかわら、講習ブースと託児所を仮設し、お母さんたちに受講しやすい環境を整えます。

講習内容を、普通救命講習だけでなく、母子手帳に記載されている乳幼児に対する救命を取り入れます。乳幼児が誤って飲んでしまった異物の取り出し方、幼児がジャングルジム等から転落し、意識を失った場合の対応など、実際に身のまわりで起こりうる出来事を想定することで、わが子の身を守るお母さんの大きな自信と支えを提供します。

また、同年代の子どもをもつお母さんが集まることで、「ママ友」ネットワークを生み出すこともできます。託児所では、子どもたちへの本を読み聞かせなどを通し、子どもたちの出会いと成長を支えます。このように、お母さんたちと救命講習との結びつきをつくり、お母さんたちの日常に受講を広めていきます。



●提案2● 家計に役立つ救命講習

お母さんたちの日常に近づけたところで、継続的な受講をうながすための家計支援策を打ち出します。母子手帳には、自治体の判断でつくることのできる任意記載事項掲載ページがあります。ここに、救命講習の受講実績を記録します。受講回数や技術の習得度に合わせて、食品や育児用品などの割引を実施します。このような子育て支援によって、受講回数を増やすとともに、技術の定着をはかっていきます。

また、母子手帳に記録を残すことで、将来子どもが大きくなったとき、子どもの命への想いをかたちにして残しておくこともできます。



●提案3● 職場に役立つ救命講習

お母さんに救命の技術が身についた頃、育児休暇後のライフスタイルを考える時期がやってきます。富山は、共働き率が高く、お母さんたちにとって職場を求めることが大きな課題となります。また、企業にとっても、お母さんたちは大切な働き手となります。

現在、多くの企業が社会貢献（CSR）として、救命講習をととても大きくとらえています。東京消防庁では、企業に対し、「救命講習受講優良証交付事業所」という公的認定も行っており、救命の能力は、企業価値の一つといっても過言ではありません。

救命の技術を身につけたお母さんたちは、企業が求める大切な人材になります。育児期間中に身につけた救命の技術が、お母さんたちの社会復帰を後押しし、企業の中でお母さんたちと歩調を合わせて、救命への意識が高まります。つまり、お母さんたちと企業との間に互いにプラスになる関係が出来上がり、救命講習がさらに大きく発展していきます。

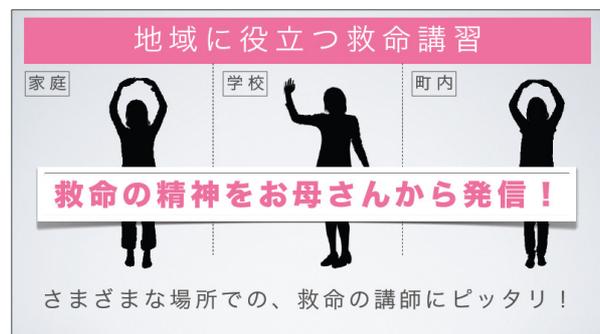


●提案4● 地域に役立つ救命講習

お母さんの存在は、企業で働くだけでなく、地域にとっても欠かせない存在です。

救命講習の資格には、「応急手当普及員」という上位資格があります。この資格をもつお母さんは、救命講習を行う講師として、町内会や校区の学校など、地域社会での活躍の場が広がります。

救命講習を身近な地域で行うことで、お母さんたちから、救命の意識が幅広く発信されていきます。



4 「お母さん」から広がる まちづくり

お母さんたちの日常に深く関わりをもった救命講習を通して、さまざまなつながりを作り出すことができます。

真剣に命と向き合い、自分にできることが何かを考えて行動するお母さんたちの姿によって、地域に暮らすわたしたちに自然と救命への意識を浸透させるとともに、安全で安心なとやまのまちを作る担い手である子どもたちにも、この思いが伝わっていきます。



富山には、お母さんたちにとっても人気の乳幼児健診がある。これが種となり、家族、友人、企業、地域にクラス多くの人たち、そして未来をつくる人々に救命の心が広がっていく。未来の富山は、救命講習を通し、市民一人ひとりが誰かを助ける正しい知識と技術をもち、行動できる勇気をあたりまえにもちあわせるまちになる。

こうした気持ちがまちいっぱい広がれば、富山はさらに素敵なまちになる。

そんな優しいまちの未来を提案します。